



佐伯市池田の在宅支援クリニック「えがお」は県南地域で数少ない訪問診療に軸足を置いた医療を展開しています。

「えがお」の訪問診療

①「えがお」が行っている訪問診療はどのようなものですか？

自宅でのみとりを希望する患者や、認知症などで通院が難しい高齢者らの自宅を医療スタッフが年中無休で巡回。持ち運び可能な小型の医療機器と電子カルテなどを使って治療に当たる。緊急時は24時間態勢で駆け付ける。



佐伯市で訪問診療をメインとした在宅支援クリニック「えがお」を開いた山内勇人医師(右)。ロゴマークが入った車で利用者を巡回する

自宅でのみとり希望

通院難しい高齢患者

佐伯 家族からの希望増加



今年2月に開院。介護老人保健施設「和の風」の一角に拠点を構え、代表の山内医師(53)が半径16キロ圏内の佐伯、津久見両市で診療する。

【佐伯】佐伯市池田の在宅支援クリニック「えがお」(山内勇人代表)は県南地域で数少ない訪問診療に軸足を置いた医療を展開する。自宅でのみとりを希望する患者や、認知症などで通院が難しい高齢者らの自宅を医療スタッフが年中無休で巡回。最近では新型コロナウイルスの影響で入院患者の面会が制限されるケースもあり、家族と過ごす時間を確保できる在宅医療のニーズが高まっているという。

カルテなどを使って治療に当たる。患者は徐々に増えて現在、約40人。緊急時は24時間態勢で駆け付ける。利用が多いのは、住み慣れた自宅で最期を迎えたいと希望する末期がん患者ら。山内医師は「がん特有の痛みを和らげるなど、入院患者と同じようにケアをしている。患者と家族の不安を取り除くことを心掛けている」と説明する。

この4カ月でみとった患者は19人。それぞれ普段の生活の延長線上で、自然な死を迎えた。家族からも自宅のみとって良かったとの声を聞く。内科だけでなく精神科の専門医でもあるため、環境が変わると病状が悪化することのある認知症患者も多く診ている。

3月以降は新型コロナウイルスに伴う問い合わせが増えた。「院内感染を起さないうえ、どの医療機関も面会には神経質になっている」と山内医師。入院すると家族と会うことが難しくなるため、自宅での治療を希望する家族から相談が寄せられるという。

「患者が自分らしく、最期まで笑顔で生きていく手伝いをするのが医療。訪問診療により、コロナ禍でも患者の選択肢を広げることができる。まずは訪問診療の存在を多くの人に知ってもらいたい」と願う。

②利用が多いのはどんな患者さんですか？

住み慣れた自宅で最期を迎えたいと希望する末期のがん患者が多い。

③新型コロナウイルスの影響はどのような形で出ていますか？

院内感染を防ぐため、入院すると家族と会うことが制限されるので、自宅での治療を希望する家族から相談が寄せられている。

④「えがお」代表の山内医師の思いや願いを書いてください。

「患者が自分らしく、最期まで笑顔で生きていく手伝いをするのが医療。訪問診療により、コロナ禍でも患者の選択肢を広げることができる。まずは訪問診療の存在を多くの人に知ってもらいたい」